

文語日誌(平成二十五年二月九日)

(注記)飽くまでも二十年前(平成五年)の手記をもとにして、その文語化を試みたるものなれば、最新情報には非ざる點、留意せられたし。

一 OPERA DE PARIS GARNIER(パリオペラ座・ガルニエ)

現在の劇場、ナポレオン三世の命によりてシャルル・ガルニエ(一八二五―九八)の設計したるものなり。一八七五年一月五日にアレヴィ作曲の「ユダヤの女」にて開場せられたり。第二次大戦にて戦災を蒙りたる他都市の有名オペラハウス(ミラノのスカラ座、ウィーン国立歌劇場等)に比ぶれば、古き良き時代の建築・調度品そのままに繼承・保存せられ、壓倒的なる美しさを誇れり。その豪華さは、世界一と謳はるることも多し。天井を見上ぐれば、シャガールの繪畫「夢と花束」、あな麗し。バステイーユのオペラハウス完成して後、ガルニエは原則としてバレエ専門の劇場と相なれり。オペラ公演、一シーズンに一演目程度に留まることとなりたるは誠に口惜しきことなり。座席數は一九九一。

シーズン九一・九二年

一九九二年はロッシーニ生誕二百年を記念し、六月にガルニエにて「セヴィリアの理髮師」の特別公演ありたり。小生、仕事の爲行くこと能はず、折角の切符を無駄にせり。

シーズン九二・九三年

CAPRICCIO(カプリッチオ)(九三年三月)

リヒアルト・シュトラウス晩年の名作、「カプリッチオ」は、この劇場に相應しき玄人好みの作品なり。精妙なる室内樂的響き、劇場と調和したり。

主役のソプラノ、フェリシテイ・ロットは英國人らしく演技力あり。フラマン役とオリヴィエ役にはドイツ人歌手を配し手堅き印象。ラロッシュ役は往年の名歌手テオ・アダムなり。一九八五年に東獨ドレスデンのゼンパー劇場にて薔薇の騎士のオックス男爵役を見て以來にて、流石に存在感、他を壓せり。

巴里にて見たるあらゆるオペラ中にも、就中傑出したる出來榮えなりき。

なほ、初日にありしフランス語字幕、次の回には無くなれり。

二 OPERA DE PARIS BASTILLE(パリオペラ座・バステイーユ)

バステイーユのオペラハウス、設計は極めて斬新にて、ウルグアイ出身のカナダ人カルロス・オット氏、七八七名の應募者より選ばれたり。

一九八九年、佛蘭西革命二百周年を記念して、七月のガラコンサート(ミッテラン大統領、各國首腦を招待す。)にて開場す。オペラ開幕は、一九九〇年三月の「トロイ人」なりき。

バステイーユの總監督は、韓國人のチョンミンフン(一九五三年生、チャイコフスキーコンクー

ルピオ部門第二位、ジュリアード音楽院出身)にて、彼の姉二人はチェリスト、ヴァイオリニストとして有名。(シヤンゼリゼ劇場にてのチョン・トリオの室内楽演奏會、記憶に残れり。)當初の總監督はブレンボイムなれど、大衆化路線の社會黨政權なる故もあらむや、ギャラの高過ぐるること問題とせられ、遂に辭任の已む無きに至り、この餘波をば受け、出演歌手も一流半程度、主流を占むるに至る。

劇場は廣すぎ、二階バルコンの天邊より舞臺を見下ろせば、豆粒の如し。經驗的に言はば、バルテレ(平土間)の前半分、臨場感ありて推奨に價す。音響は總じて良けれど、座席の上が上階の觀客席となれる軒下箇所は避くべし。(字幕の見えぬ席も有り。)

座席案内人より當日の出演者リストの印刷物を貰ふこと、忘るべからず。

バスターユのオペラには幕間に寛ぐこと可能なるフオワイエ的空間無し。されば、休憩時間には、SORTIE(出口)カードを貰ひて外に出ることも一案。行きつけのクスクス屋ならば、二十分にも空腹を満たすことを得。(クスクス・ブフ(牛肉)33フラン)お客を伴ふ際は隣のレストラン、グラン・マルシェがおすすめなり。幕間のサービスに慣れ、テキパキして居る様子、心地良く、冬場ならば牡蠣數個とオマールのグラタンあたり、或はタルタルステーキも美味なり。座席數は二七一六席。

シーズン九〇・九一年

RECITAL LUDWIG(九〇年一月)

初めてバスターユのオペラ座に足踏み入れたるは、獨逸のメゾソプラノ、クリスタ・ルートヴィツヒのシューベルト「冬の旅」の全曲演奏なりき。劇場は、螢光燈のみにて殺風景との第一印象なり。席は第二バルコンの三列目にて全く臨場感無く、恰も遠くよりテレビ畫像を見るが如し。ルートヴィツヒは、ストックホルム駐在時に王立歌劇場にて聴きたるときに比べ稍衰へたるとは雖も、凄味のある「冬の旅」なりき。特にスローテンポの第十一曲「春の夢」、印象に残れり。當然のこと乍ら、獨逸語は美しく、オペラの迫力にも缺くる處無し。

*小生の「冬の旅」全曲のコレクション(CD及びLP)七一種類(當時)のうち、女聲によるものは、レーマン、マーシャル、ルートヴィツヒ、フラスベンダー、白井光子の五種のみなり。

RECITAL RICCIARELLI(九〇年二月)

伊太利のソプラノ、カーティア・リッチャレッツリのリサイタルなり。第一部は單なる發聲練習に過ぎず。樂譜を見つつヴィヴァルディ、ヘンデル、グルックの有名ならざる曲ばかりを歌ふ。音は不安定にして上り切らず、調子悪しきかと訝しく思ふ。第二部に入り、尻上がりになり、ケルビーニの「メデア」、ロッシーニの「タンクレーディ」、そしてプログラムを變更してのマスネーの「ルシッド」のアリアを立派に歌ひ上ぐ。本領を發揮したるは、アンコールに入りての後にて、オペラ・アリア三曲(リユー、ワリー、アドリアーナ)を含み勿忘草、タランテラなど合計9曲を觀客の反應に合はせて熱唱したり。觀客の大いに沸きたること、言ふまでも無し。